

消極的終活と積極的終活

日本想続協会 代表・税理士 内田麻由子

終戦後間もないころ、ある和尚が戦争から帰ってきてみると、由緒あるお寺はまる焼けで、瓦のかけらばかり。ようやく家族の疎開先をたずねあて、それから焼跡にバラックを建て、どうにか今年から本格的に復興にのりだそうというところで病気になって、亡くなりました。その亡くなる時、家族のものを枕もとに集め、「わしの一生は貧乏のしどおしでみんなにも苦勞をかけてすまん。しかしみなさんからご親切にしてください、わしは倖せじゃった。これで一卷の終わりじゃ」といって、ニッコリ笑って死なれたというのです。(山田無文『むもん法話集』)

終活に取り組む人が増えています。「子どもに迷惑をかけないように、葬儀やお墓の準備をしておきたい」「相続で争いにならないように、遺言をつくっておきたい」と考える方が多いようです。しかし、「迷惑をかけないように」「争わないように」ということは、マイナスをゼロにする、いわば「消極的終活」にすぎません。それだけではあまりに寂しいと思うのです。迷惑さえかけない死に方ならばよいのでしょうか。

そこからもう一歩進んで、「死をみつめて今をどう生きるのか」「子や孫に何を伝え遺すのか」「家族や友人に感謝の気持ちを伝える」という、ゼロをプラスにする「積極的終活」をぜひ考えたいのです。積極的終活をするためには、自己をみつめ、無常と無我をおしえる仏教の力が必要であると感じます。葬儀やお墓のカタチを決める「終活」の前に、自分の死生観について考える「宗活」こそ大事なのではないのでしょうか。

先の和尚のように、たとえ貧乏で家族に苦勞をかけどおしの一生だったとしても、おそらく家族の誰ひとりとして、迷惑だなどとは思っていなかったはず。家族みんなでお寺の死を心から悲しみ、枕もとでおいおいと声をあげて泣いたことでしょう。「わしは倖せじゃった」といって、ニッコリ笑って死んでいった和尚は、家族に何よりの遺産を遺したのです。

